

原著論文 環境教育を实践できる保育者養成のあり方について

—保育者養成系短大生の環境教育経験及び  
環境問題や自然についての考え方の実態をもとに—

井上 美智子\* 田尻 由美子\*\*  
姫路学院女子短期大学\* 精華女子短期大学\*\*

Training Programs for Early Childhood Educators  
Who Can Practice Environmental Education  
— Based on the Analysis of Learning Experiences about Environment  
and Environmental Views of Junior College Students —

Michiko INOUE\* Yumiko TAJIRI\*\*  
Himejigakuin Women's Junior College\* Seika Women's Junior College\*\*

(受理日1999年3月12日)

The survey of junior college students in training courses for early childhood educators showed that (1) they have a lot of experiences in nature during their childhood, however, they have not learned environmental issues enough in school, (2) so at this moment, their deep concern for nature and environmental problems does not lead them to act ecologically. Based on these results, we want to make programs in training schools in order to train students for early childhood educators who can conduct environmental education responsibly. The goals of training programs include (1) to realize environmental issues and the need of environmental education from the early childhood, (2) to develop environmentally responsible behaviors, and (3) to develop practical skills of environmental education, especially focusing on interacting play with nature. To achieve these, the training course for early childhood educators should be improved in the fields of curriculum, educational methods, and contents.

Key words : Early Childhood Educators, Environmental Education, Training Programs

1. はじめに

幼児期からの環境教育の必要性は言うまでもないが、その具体的実施には幼稚園や保育所などの保育現場が大きな役割を担うであろう。保育の場での環境教育が確立するためには、幼稚園教諭や保育士などの保育者が環境教育への意識を高め、実践力を持つことが重要であり[井上(1992)、岩崎

ら(1995)、田尻ら(1996)]、この観点からの保育者養成が必要である。しかし、養成の8割を担う短期大学を対象に調査した結果、一部で環境教育に相当する内容が実施されているのみで、全体として十分とはいえない[田尻ら(1995)]。

教育職員養成審議会答申(1997年7月28日)では環境教育を含めた様々な教育課題への対応が教員養成に求められ、「総合演習」などの科目の新設に

(問い合わせ先) 〒679-2281 兵庫県神崎郡福崎町高岡 姫路学院女子短期大学 井上美智子

至っている。現在、短期大学や四年制大学、専門学校などの幼稚園教諭養成機関では新教育職員免許法(1998年7月1日施行)に伴う教育課程の検討が行なわれつつある。また、幼稚園教育要領改訂が告示され(1998年12月14日)、保育所保育指針改訂や保育士養成の教育課程の改革も予定されている。こうした保育者養成をめぐる現状は、環境教育を視野にいった教育のあり方を検討するよい機会だといえる。

本稿では、以上のような背景のもと、環境教育を実践できる保育者を養成するための養成課程における開講科目の編成、教育内容、教育方法のあり方について検討する。しかし、その検討のためには、まず、対象となる学生の実態を十分踏まえることが必要である。そこで、今回は保育者養成の中心を担う短期大学の学生が入学までに受けてきた「環境教育経験」と、それにも影響されながら形成してきたであろう「環境問題や自然についての考え方」の実態を調査し、その結果から環境教育を実践できる保育者を養成するための課題や目標を明確にした上で、教育のあり方を検討することにした。また、小学校以上の学校教育における環境教育と違い、幼児期の環境教育は、知識の伝達ではなく、五感を使って楽しく遊ぶ体験を通してなされることが特徴である。新幼稚園教育要領においても幼児期において自然の持つ意味は大きいとされている。したがって、保育者は自然と触れ合う遊びを豊かに知っており、適切に援助がで

きるような実践力を持つことが重要であろう。この点も考慮し、短期養成校を中心とする保育者養成課程における開講科目の構成、教育内容、教育方法について、現実的で具体的なあり方を提案したい。

## 2. 保育者養成系短大生の環境教育経験と環境問題や自然についての考え方の実態

### (1) 調査内容及び方法

表1のように短大入学までの環境教育経験(A~D)と調査時点における環境問題や自然についての考え方(E~H)についての質問項目群を設定した。環境教育は従来の教科的な概念でとらえることができないだけに何をもって環境教育経験とするかの議論を要するところだが、今回は「子どもの頃の自然と触れ合う遊び経験(A)」や、「学校の授業における自然体験や環境問題、環境配慮の生活のあり方についての学習経験(B)」を環境教育経験とした。また、環境教育を経験する場として授業以外にも学校行事やクラブ活動、あるいは、地域なども一つの役割を担ってきたと思われる。そこで「学校の授業以外での行事やクラブ活動など(C)」や「地域など学校以外(D)」における様々な活動についても環境教育経験として調査した。次に、調査時点での環境問題や自然についての考え方の実態を知るために「環境問題や自然についての程度関心を持っているか(E・G)」、「生活の中でそれらを意識した実践をどの程度しているか

表1 質問項目群

#### 〈環境教育経験〉

- A: 子どもの頃の自然と触れ合う遊び経験
- B: 学校の授業における自然体験や環境問題、環境配慮の生活のあり方についての学習経験
- C: 学校の授業以外(行事やクラブ活動など)の場でした環境教育経験
- D: 地域など学校以外の場でした環境教育経験

#### 〈環境観〉

- E: 環境問題への関心
- F: 環境配慮の生活の実践
- G: 自然への関心
- H: 自然と触れ合う生活の実践

#### 〈その他〉

- I: 年齢、保育職への志望の有無、取得希望資格

表2 調査対象

短期大学名	S短期大学	H短期大学
所在地	福岡県福岡市	兵庫県神崎郡
学科名	幼児教育科	児童教育科
免許・資格	幼稚園教諭・保育資格	幼稚園教諭・小学校教諭
入学年度	1996年度	1996年度
調査人数	145名	176名

(F・H)』をたずねる項目を設定した。

以上の8項目群(A~H)と保育職(幼稚園教諭あるいは保育士)への志望の有無など(I)の計9項目群について質問紙法による調査を、表2の対象校での授業時間を一部利用し1996年10月に行なった。回答は5段階評定からの単一選択、または、多項目からの選択(複数可)とした。実際の質問内容は結果に示した。なお、「学校の授業における環境教育経験(B)」の質問をする際、「公害や地球規模での環境問題全般の学習」については(E)の質問項目、「身近な生活における環境との関わり方の学習」については(F)の質問項目、「実際に自然と触れ合う体験」については(H)の質問項目を具体的な内容として参照するよう質問紙に記載した。

## (2) 結果及び考察

### ① 調査対象の属性

回答者の性別は全員女性。年齢は全回答者321

名中18歳が122名(38.0%)、19歳が177名(55.1%)、残りが20~22歳であり、ほとんどの学生が1990年代に入ってから中学校・高等学校に在学した。回答者320名中295名(92.2%)が幼稚園教諭免許の取得希望、207名(64.7%)が保育士資格取得希望であった。保育士資格取得希望が少ない理由は対象校の一つが国家試験の受験を経てしか資格が取れないことによる。また、回答者315名中249名(79.0%)が保育職に就きたいと希望した。

### ② 子どもの頃の自然と触れ合う遊び経験(図1)

学生の半数以上(50.2%~75.4%)が子どもの頃に自然と触れ合う遊び(A1~A6)のどの項目についても「非常によくした」あるいは「かなりした」と答えた。理由の一つとして両調査対象校とも比較的自然が残っている地方出身学生が多いことが考えられる。この結果自体は望ましいといえるが、10年のような短い単位で社会や自然環境が急変す

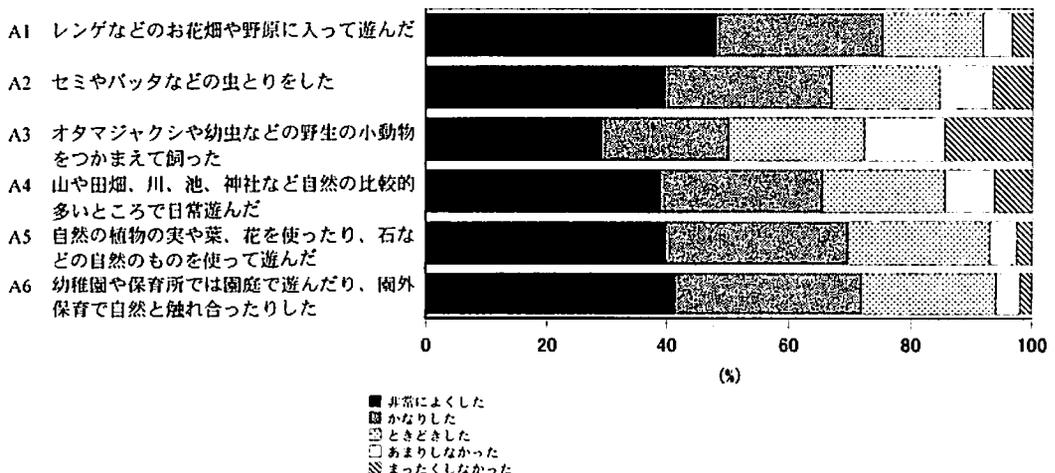


図1 子どもの頃の自然と触れ合う遊び経験

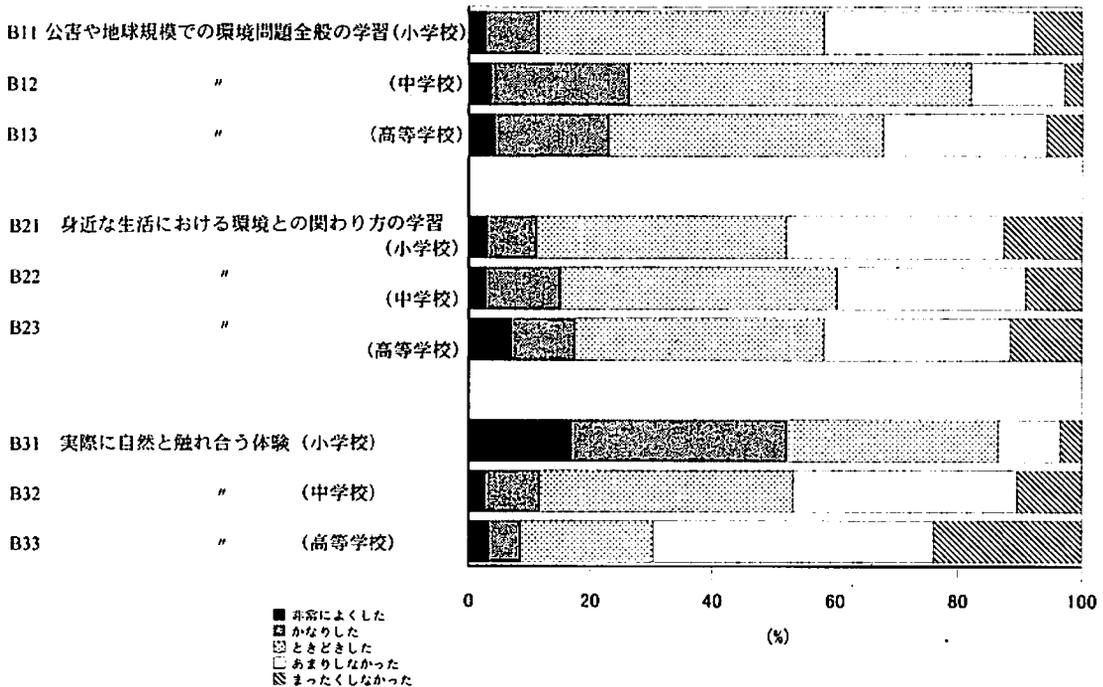


図2 学校の授業における環境教育経験

る現実を考えれば、学生の子どもの頃と現在とでは環境の質も変わっている。今の子どもを取り巻く環境がよくなっているとは言いがたく、自然と触れ合う遊び経験は少なくなっているであろう。したがって、この結果を評価し、保育者として子どもたちへ伝えていく力を養う必要がある。

### ③学校の授業における環境教育経験(図2)

全般にみると「非常によくした」あるいは「かなりした」と答えたのは「実際に自然と触れ合う体験(小学校)」(52.0%)をのぞけば、1~2割程度(8.6~26.4%)の学生だった。学生たちが中学校・高等学校に在学した1990年代前半は、1989年の学習指導要領改訂を受けて学校教育における環境教育が実践され始めた時期だが、学生たちは環境教育を経験したという意識をあまり持っていなかった。つまり、学校教育における環境教育の必要性が認められても学生の意識に残るほど十分に実践されなかったといえよう。内容別では、「公害や地球規模での環境問題全般の学習」と「身近な生活にお

ける環境との関わり方の学習」は小学校より中学校・高等学校での経験がやや多い傾向にあった。一方、「実際に自然と触れ合う体験」について「非常に」あるいは「かなり」経験があると答えた学生は小学校52.0%、中学校11.7%、高等学校8.6%と小学校・中学校・高等学校へ進むにつれ減少した。これらの結果は小学校では知識を深めるより自然中心の体験学習が重視されるという理由によると思われるが、対象学生は小学校では旧学習指導要領下での教育を受けており、現要領ほど環境教育的内容が意識されなかったとも考えられる。子どもの頃に自然と触れ合う経験をよくした学生が中学校・高等学校でその機会を十分に持たなかったことは、学生たちの自然離れにもつながっていると思われる。田尻(1985)も小学校から中学校、高等学校へと進むにつれ自然への興味や関心が減少すると報告した。また、中学校・高等学校では「公害や地球規模での環境問題全般の学習」より「身近な生活における環境との関わり方の学習」の

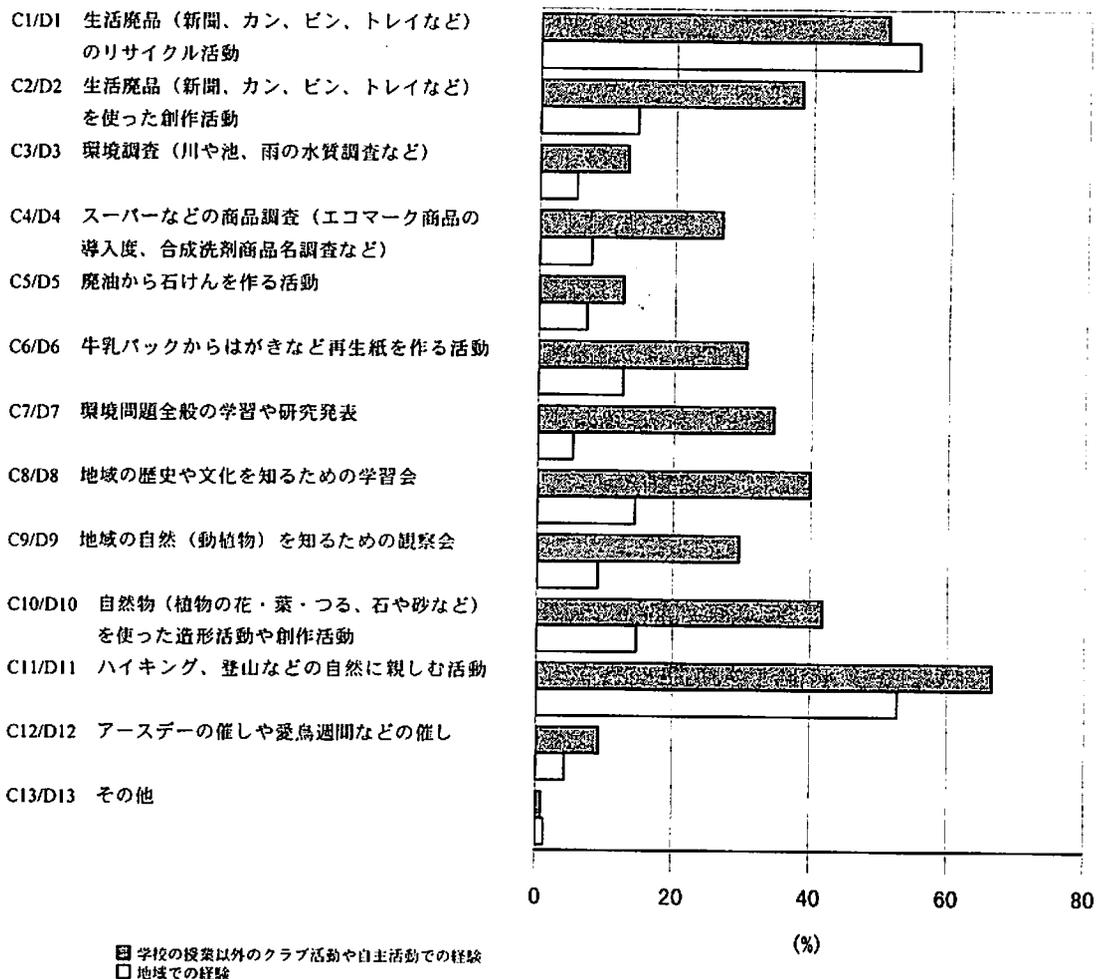


図3 学校の授業以外及び地域における環境教育経験

経験が少ない傾向だったが、環境問題を身近な生活との関わりという視点ではあまり学習しなかったということだろう。

#### ④学校の授業以外及び地域における環境教育経験 (図3)

学校の授業以外でのクラブ活動や自主活動(C1~C13)においては「生活廃品のリサイクル活動」(50.9%)や「ハイキング、登山などの自然に親しむ活動」(66.6%)の経験が多く、「生活廃品を使った創作活動」(38.4%)や「学校のある地域の歴史や文化を知るための学習会」(40.0%)、「自然物を使っ

た造形活動や創作活動」(41.9%)などの経験も比較的多かった。一方、地域(D1~D13)では「生活廃品のリサイクル活動」(55.3%)や「ハイキング、登山などの自然に親しむ活動」(52.8%)について、学校の授業以外の場と同様に半数以上が経験したと答えた。しかし、それ以外の項目の経験があったとしたのは1割程度(4.4~14.7%)であった。つまり、環境教育につながる内容は地域よりは学校の課外活動でより多く取り入れられていた。これは、当事者の主体的参加を前提としている地域活動より、参加自体が前提であることが多い学校の方が

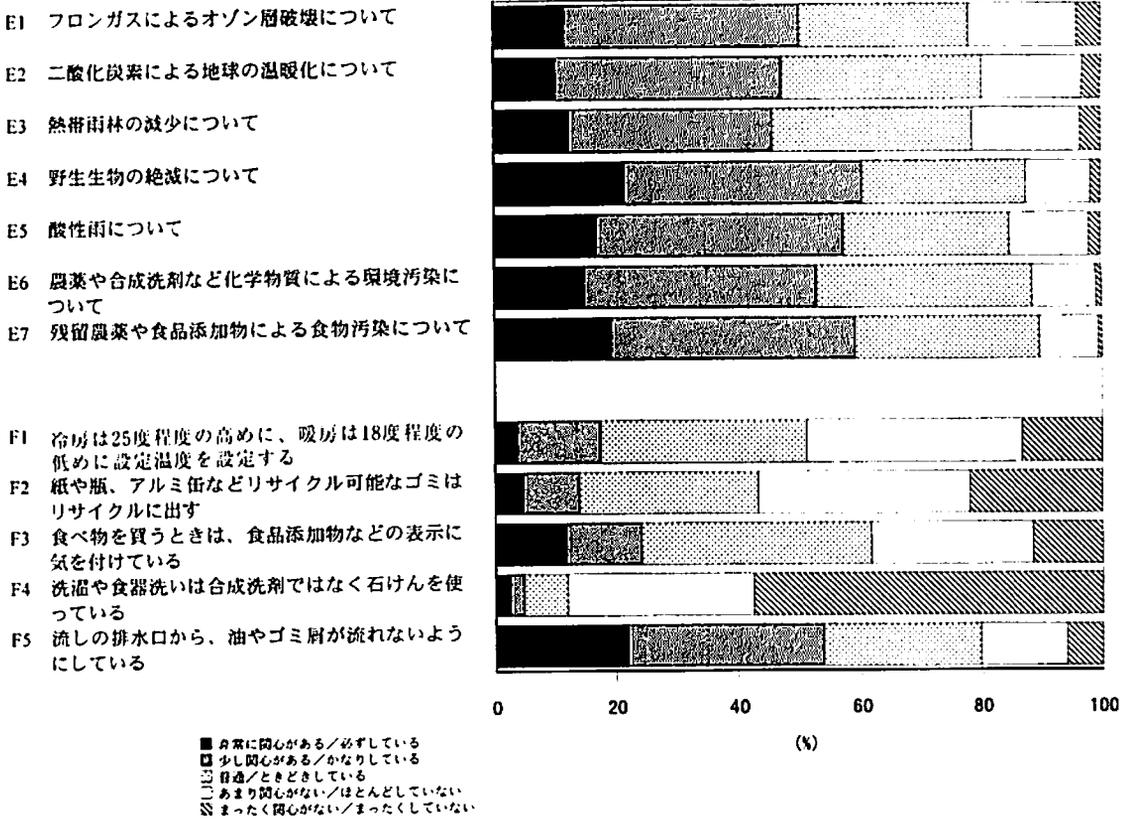


図4 環境問題への関心と環境配慮の生活の実践

環境教育につながる内容を経験しやすい場であったといえ、今後も環境教育の実践には様々な機会をより多く与えられる学校教育現場の活用が最も重要であろう。しかし、高い回答を得た「リサイクル活動」は古新聞回収のように以前からPTAや地域の自治会活動として行なわれたり、「ハイキング」は健康増進の目的で行なわれるなど取り組みやすい活動であったと考えられる。学校で比較的经验者が多かった創作活動や地域を知る学習会なども美術科教育や社会科教育としての目的があったのだろう。このような従来から行なわれてきた内容についても、今後は環境教育の視点を明確に据える必要がある。

⑤環境問題への関心と環境配慮の生活の実践(図4)

環境問題への関心(E1~E7)については、どの

項目もほぼ半数(45.8~60.4%)が「非常にある」または「少しある」と答えた。なかでも「野生生物の絶滅について」(60.4%)や「酸性雨」(57.3%)、「残留農薬や食品添加物による食物汚染」(59.2%)などが比較的高い数値を示した。一方、環境配慮の生活行動(F1~F5)については、「流しの排水口から、油やゴミ屑が流れないようにしている」は半数以上の学生(53.9%)が「必ず」あるいは「かなり」していたが、それ以外の項目については1~2割程度(4.7~24.3%)であった。「農薬や合成洗剤などによる環境汚染」や「食物汚染」に関心があっても、合成洗剤より石けんを使ったり買い物の際に表示に気をつけたりする学生は少ない。つまり、環境問題に関心はあるが環境配慮の生活行動はあまりしていないといえる。環境教育をよく受けたという意識を持つ学生が少ないにもかかわらず環境問

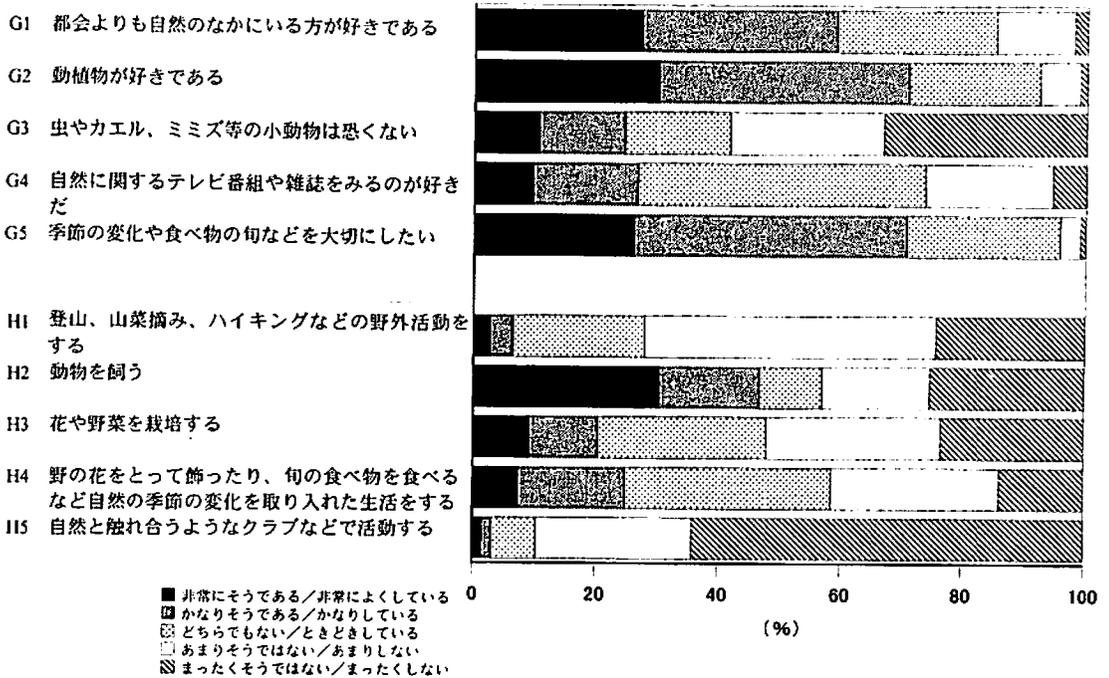


図5 自然への関心と自然と触れ合う生活の実践

題に関心があるというのは、正確な知識や実態理解を基礎としているのではなく、マスメディア等を通して意識化されているにすぎないのではないだろうか。田尻(1997)も養成系短大生対象に調査を行ない、オゾン層破壊と地球温暖化が混同されるなど正確に知識として身につけていない例を報告している。

#### ⑥自然への関心と自然と触れ合う生活の実践(図5)

まず、自然への関心(G1~G5)については「都会よりも自然のなかにいる方が好きである」(59.2%)や「動植物が好きである」(71.0%)、「季節の変化や食べ物の旬などを大切にしたい」(70.7%)という項目について、多くの学生が「非常にそうである」あるいは「かなりそうである」と答えた。しかし、「虫やカエル、ミミズ等の小動物は恐くない」(24.6%)や「自然に関するテレビ番組や雑誌をみるのが好きだ」(26.8%)としたのは少なかった。また、自然と触れ合う生活(H1~H5)については半数近い学生が「動物を飼う」(46.7%)が、「花や野菜を栽培する」(20.6%)や「野の花をとって飾っ

たり、旬の食べ物を食べるなど自然の季節の変化を取り入れた生活をする」(24.9%)は2割程度の学生しかしておらず、他の2項目は1割に満たなかった。自然や動植物は好ましく思うが、小動物は恐く、野外活動や栽培はしていないなどの実態が明らかになった。これを⑤の環境問題に関心があっても環境配慮の生活はあまりしていないという結果とあわせると、理屈や観念上では意識や理解がある反面、現実身近な環境に配慮したり親しむ行動をとることは消極的だといえる。これは他の報告においても指摘されている[井上(1993)、井頭(1993)、井上(1995)]。

#### ⑦質問項目群内における関連(表3)

全項目について相関係数をとると、「子どもの頃の自然と触れ合う遊び経験(A)」の項目内(表3-a,  $r=0.327\sim0.695$ )と「環境問題への関心(E)」の項目内(表3-b,  $r=0.395\sim0.789$ )において比較的高い相関がみられた。子どもの頃の自然と触れ合う遊び経験では、経験の程度が互いに関連しており、よくしたという学生はいろいろな遊びを経験したが遊ばなかった学生はどの遊びもしていない。

表3 質問項目群内の相関係数

## (a) 子どもの頃の自然と触れ合う遊び経験(A)の項目群内の相関係数

	A1	A2	A3	A4	A5
A2	.498				
A3	.432	.695			
A4	.578	.560	.539		
A5	.624	.551	.521	.658	
A6	.439	.361	.327	.482	.553

A1～A6の質問内容については図1参照

## (b) 環境問題への関心(E)の項目群内の相関係数

	E1	E2	E3	E4	E5	E6
E2	.789					
E3	.625	.635				
E4	.510	.488	.638			
E5	.628	.588	.534	.495		
E6	.495	.510	.504	.456	.583	
E7	.489	.444	.408	.395	.518	.678

E1～E7の質問内容については図4参照

える。つまり、自然と触れ合う遊び全般の経験がない学生やどのような環境問題にもほとんど関心がない学生がいるという実態が推測でき、そうした学生たちの自然体験不足を補い環境問題への関心を高めるような教育、具体的には教室外での自然体験学習を豊富に取り入れたり、環境問題が身近な生活に結びつく事例を扱うような内容が望まれる。

## ⑧質問項目群間における関連(表4)

A～Hのそれぞれの回答項目を1～5点に点数化して項目群ごとに得点総和をとり、質問項目群間で相関をみた。その結果、「子どもの頃の自然と触れ合う遊び経験(A)」と「自然と触れ合う生活の実践(H)」がそれぞれ「自然への関心(G)」との間に0.4以上の相関係数を示した(表4-a)。つまり、子どもの頃に自然と触れ合う遊びを経験することと成長してから自然へ関心を持つことの間、また、自然への関心を持つことと自然に触れ合う生活行動をすることの間には関連があるといえ、子ども期の自然との触れ合いがその後の生涯における自然への関心や関わり方に関係する可能性を示している。呉ら(1998)の調査においても子どもの時の自然体験が多い人ほど自然優先的態度をとる価値観を持ちやすいということが明らかにされている。また、「学校の授業以外での環境教育経験(C)」と「地域での環境教育経験(D)」との間も0.4以上の

同様に環境問題への関心の程度も互いに関連し、環境問題に関心のある学生はどの項目にも関心があるが、ない学生はどれにも関心を示さないとい

表4 質問項目群間の相関係数

## (a) 自然に関する質問項目群間の関係

	子どもの頃の自然と触れ合う遊び経験 (A1～A6の得点総和)	自然と触れ合う生活の実践 (H1～H5の得点総和)
自然への関心 (G1～G5の得点総和)	.431 (<.0001)	.477 (<.0001)

## (b) 環境教育経験に関する質問項目群間の関係

	学校の授業以外の場でした環境教育経験 (C1～C13の得点総和)
地域などの学校以外の場 でした環境教育経験 (D1～D13の得点総和)	.417 (<.0001)

相関係数を示した(表4-b)。学校の授業以外での経験と地域での経験の程度に関連があるという結果は、学校での経験が自発的参加を前提とする地域での活動にも参加をうながす要因の一つとなることができることを示している。

### 3. 環境教育を実践できる保育者養成のあり方について

前節で明らかになった保育者養成系短大生の環境教育経験と環境問題や自然についての考え方の実態をまとめると以下の通りである(図6-a)。環境教育経験については、子どもの頃に自然と触れ合う遊びはよく経験し(ア)、学校の授業では自然と触れ合う体験は小学校ではよくしたが、環境問題や環境配慮の生活についての学習は小学校～高等学校いずれにおいてもあまり経験しなかった(イ)。また、現状では環境問題や自然について関心はあるが(ウ)、環境配慮の生活はしておらず、自然に触れるような具体的実践もしていない(エ)。こうした学生の実態から、関心の高さを無駄にせず正確な知識として理解させることと、関心を持つことから行動することへの変容が課題だといえる。また、子どもの頃によく自然と触れたという経験を生かし幼児期の環境教育を実践する指導力をつけることが求められる。

次に、筆者らが考える「幼児期の環境教育を実践できる保育者像」を3点に絞り提示する(図6-c)。

第一は、環境問題や自然を正しく理解し、幼児期からの環境教育の必要性を認識している保育者である。ここでいう「正しく理解する」とは、単に知識として知っている、あるいは、関心を持つことではない。例えば、地球史において40億年かけて進化した生物の存在の重みや自然の不可逆性を認識したり、自然を生態系や物質循環系としての一つのシステムととらえるような視点を持つことである。また、環境問題が緊急性をおびた全人類の問題であることや自分自身に関わる重大な問題だと理解していることである。このように正しく理解することにより、対応策の一つとしての幼児期からの生涯的な環境教育の重要性を認識できるのである。

第二は、正しく理解した上で、環境保全や自然に積極的に関わる行動力を持つ保育者である。幼児期は知識伝達よりは直接体験を通して発達する時期であるから、幼児が望ましい体験を得られるように保育環境を構成する実践力を持つことは言うまでもない。さらに、保育者の具体的な日常の姿が幼児にとって行動モデルとなるという点で、生活の場だけでなく保育の場でも環境保全や自然に積極的に関わるよう実際に行動することが望まれる。

第三は、幼児期の環境教育を実践する保育指導力を持つ保育者である。5領域に関わる基本的な保育技術を十分身につけていることは言うまでもないが、自然と触れあう遊びを数多く実践でき、適切に援助できる指導力が必要である。幼児期の環境教育は、動植物の名前を知ったり、自然を単なる教材として造形表現に使うような関わり方だけではなく、自然と一体になったり、五感を十分に使って自然を感じるような遊び経験が重要である。従来から行なわれてきた飼育栽培活動や草木遊びなどに対しても環境教育的視点からの創意工夫が求められる。このように身近な自然を日々の保育に生かし、様々な自然遊びを創造する保育指導力を持つためには、保育者自身の自然に対する感性が重要である。

以上のような、「幼児期の環境教育を実践できる保育者」の養成を目的として、前述した学生の実態をふまえた上で、具体的な達成目標として次の3点をあげる(図6-b)。

- <1> 環境問題や自然を正しく理解し、幼児期からの環境教育の必要性を認識する。
- <2> 身近な生活のなかで環境保全や自然に積極的に関わる行動力を持つ。
- <3> 自然と触れ合う遊びを中心とした幼児期の環境教育の保育実践力を持つ。

以下に、保育者養成機関の授業における上記3つの目標の達成をめざした具体的な教育のあり方を、開講科目の構成、教育内容、教育方法の3側面から検討し、提案する。

### 学生の実態(a)

- (ア) 子どもの頃の自然体験は比較的多い
- (イ) 学校では環境教育は十分受けていない
- (ウ) 環境問題や自然への関心は高い
- (エ) 環境配慮の生活行動や自然に触れる実践はしていない



### 保育者養成における環境教育(b)

#### [目標]

- 〈1〉環境問題や自然を正しく理解し、幼児期からの環境教育の必要性を認識する
- 〈2〉身近な生活のなかで環境保全や自然に積極的に関わる行動力を持つ
- 〈3〉自然と触れ合う遊びを中心とした幼児期の環境教育の保育指導力を持つ

#### [開講科目]

上記目標〈1〉～〈3〉に対応する3科目を開講

#### [教育内容]

- 〈1〉身近でわかりやすい話題・リアルタイムの情報・環境教育の歴史や役割
- 〈2〉環境配慮の生活や自然と共生した生活の紹介・身近な生活を対象とした調査
- 〈3〉自然体験・自然遊びの指導技術・環境に配慮した保育環境例

#### [教育方法]

- 〈形態〉双方向型、参加型、体験型授業・グループワーク・学外授業や宿泊野外活動・模擬保育授業
- 〈教材〉新聞や視聴覚教材の活用・インターネットの利用・簡易実験キットの利用
- 〈人材〉NGO関係者や現場保育者などの学外講師起用・チームティーチング・科目担当者間調整



### 保育における環境教育を実践できる保育者像(c)

- ①環境問題や自然を正しく理解し、幼児期からの環境教育の必要性を認識する保育者
- ②正しい理解をした上で、環境保全や自然に積極的にかかわる行動力を持つ保育者
- ③幼児期の環境教育を実践する保育指導力を持つ保育者

図6 環境教育を実践できる保育者養成の過程モデル

### 〔開講科目の構成〕

開講科目は、上記の目標<1><2><3>それぞれに対応する3科目が養成期間内に連続して構成されることが望ましい。新教育職員免許法に基づく「総合演習」は国際理解教育や人権教育などの様々な課題への対応も目的としており、それだけで環境教育への対応とするのは不十分で、あくまでも前述の目標に対応する3科目は「総合演習」とは別途開講で対応したい。また、<1><2>に対応する科目は保育者自身の環境問題や自然についての正しい理解や行動力の養成をめざすものであり、いわゆる教養的科目や保育士養成課程の基礎科目などにおける開講が望ましい。<3>に対応する科目は実際の保育活動における環境教育としての指導技術の訓練をするものであるから、領域「環境」を中心とする保育内容の指導法における科目が適当であろう。また、教科に関する科目などで生物学的基礎知識や科学遊びの知識をつける科目を開講することも可能である。さらに、卒業研究などの自己の課題への探求ができる科目において保育指導力を深める機会があれば望ましい。ただし、保育者養成の8割は2年間の短期養成校であり、必要最低限の科目に絞り込んで開講せざるをえない現実がある。したがって、その場合は<1><2>の目標に対して同一科目で対応したり、「総合演習」で扱うこともやむをえない。いずれにせよ<2>の行動力養成を目的とする内容を必ず該当科目に位置付け、<3>は<1><2>とは別に保育内容の指導法の科目で対応するという点を強調したい。

### 〔教育内容〕

まず、<1>に対する内容として、環境教育を受けた経験が少なく、環境問題全般への関心が低い学生がいる実態を前提に、基本的知識をわかりやすく提供し、学生生活に身近な問題を取り上げ、しかも、リアルタイムの内容を利用することが必要である。また、環境先進国の環境に配慮した生活や各国先住民の自然と共生した生活の紹介など、幅広い題材の導入が大切である。そして、環境問題とその構造を理解するだけではなく、環境教育の役割や歴史、国際的取り組みなども知り、環境教育の実践者としての自分の役割や責任を意識さ

せるべきであろう。特に、幼児期の経験がその人の原体験となることなどから、生涯的に必要とされる環境教育の中でも幼児期は他の時期にない重要性を持つ。こうした幼児期の環境教育の重要性を認識するには、保育の専門教育を通して幼児理解を深めていくことが必要である。

次に、<2>に対する内容としては、学校教育の中でも環境問題と個人の生活との間隙が埋められておらず、関心が実践につながっていないという実態から、環境問題が社会システムの変容を必要とする地球的規模の問題である一方、個人の問題でもあると認識できる内容が重要である。環境家計簿の記入や家電製品の消費電力調査から地球温暖化を考えたり、自分のゴミの内容分析から廃棄物汚染を考えるなど、自分の生活を調査対象とした具体的で身近な経験を取り入れる必要がある。また、個人の行動力の重要性を知るために環境NGOの活動などの紹介が有効であろう。さらに、保育の実践者としての日々の具体的活動がどうすれば環境保全の視点に立てるかを検討する機会を持つことも必要であろう。

さらに、<3>に対する内容としては、第一に、子どもの頃は自然と触れ合う経験が豊かでも成長と共に減少したという学生の実態から、身近な自然環境に意識的に触れ合う機会を多く持つことが必要である。例えば、校庭や近隣の公園での植物採集や観察、ネイチャーゲームなどを体験させたり、身近な植物や石などの自然物を使った遊びを数多く紹介し、実際に遊び、自ら楽しむ体験をさせることである。そうした体験を積むことが、幼児に共感したり、身近な園内外の自然を保育に生かしたり、様々な自然遊びを発見したりするような自然への豊かな感性を持つ保育者の養成につながるであろう。第二に、従来からなされてきた保育活動に対しても環境教育を意識した視点を加えることが必要である。例えば、学生が栽培活動を体験する際には土に触れ生物を慈しみ育てる経験をするだけでなく、農薬などを使わないような環境配慮の仕方で行なったり、人工的な素材を使わずに野外で岩や木の幹などをキャンバスにして自然物だけを使った造形表現をしたり、五感を刺激

する遊び方を知るなどの内容が考えられる。さらに、保育の場における教材や施設設備も環境に配慮したものを選択する必要性を意識させておくべきであろう。第三に、新幼稚園教育要領(1998年12月14日告示)でも「自然との関わり」が重要視され、領域「環境」だけではなく他領域の指導においても「自然との関わり」を意識した内容を取り入れる必要性がでてきた。これにより保育内容の指導法の授業においても「自然との関わり」を主題にして領域ごとの科目の枠を越えた総合的な指導が可能となる。例えば、野外活動において領域「環境」だけではなく「健康」や「表現」などの他領域と合同で内容を企画することが考えられる。以上のように、幼児期の環境教育の保育実践力を養成するためには、保育内容の5領域や基礎技能などの基本的な保育指導技術を十分習得させることが前提であるが、自然に対する感性を磨き、従来の保育活動に環境教育の視点を加えた内容を経験させ、全領域での総合的な取り組みをさせることが必要である。

#### 【教育方法】

まず、授業形態として考えられるのは教員と学生の双方向型や学生の参加型授業、体験型授業である。教員との討議や学生の自主レポート作成とその発表会〔和田(1993)〕、学生同士が互いの経験を共有しながら学習するグループワークなどは行動変容を求める場合に有効だろう。さらに、教室内の授業だけでは不十分で、地域をフィールドワークの対象としたり、公園など比較的自然の多い場所を利用しての学外授業や宿泊を取り入れた野外活動などが有効だろう。また、学生自らが指導計画を立案し、それによって保育実践を模擬的に行ない、全員で相互評価の上、討議して実践力を深めるような授業を設定するとよい。

教材としては、環境問題や自然について正しい理解をするために身近でリアルタイムの情報を新聞やテレビなどの情報媒体から提供したり、ビデオなどの視聴覚教材を積極的に利用することが望ましいが、インターネットなどの情報通信媒体も今後は効果的な教材となるだろう。また、体験を通して現実を知るためには、酸性雨調査などの簡易な実験キットを利用することも必要である。

教育する側の人的要因については、一人の教員の知識や経験だけでは不十分で、学外講師としてNGO関係者や地域で環境保全に貢献している人の起用、学内外の異なる領域を専門とする複数教員によるチームティーチング、複数科目で内容に関連性を持たせられるように科目担当者間調整をすることなどが必要である。さらに、保育指導力の養成のためには、環境教育の必要性を十分認識して現場で実践している保育者や自然観察指導員などの自然活動の専門家の起用が望ましい。

さらに、授業担当者だけではなく養成校全体が環境に配慮した管理運営がなされているかも重要で、学内廃棄物の扱い方や印刷物配布のあり方、環境配慮型商品の利用、電気・水道の消費などについて、教育現場が率先して望ましい実践をすることが学生の行動変容に大きく影響するだろう。

#### 4. まとめ

保育者養成系短大生の入学までの「環境教育経験」と「環境問題や自然についての考え方」を調査し実態を明らかにした上で、「環境教育を实践できる保育者養成」の教育のあり方を検討した。調査の結果から、子どもの頃の自然体験は比較的多いが、環境教育を十分受けたとはいいがたく、現状では自然や環境問題への関心は高いが、行動には結びついていないことがわかった。この実態と、幼児期の環境教育を实践する保育者の望ましい姿をふまえた上で、保育者養成課程における教育目標として<1>環境問題や自然を正しく理解し、幼児期からの環境教育の必要性を認識する、<2>身近な生活のなかで環境保全や自然に積極的に関わる行動力を持つ、<3>自然と触れ合う遊びを中心とした幼児期の環境教育の保育実践力を持つの3点をあげた。これらを達成するための保育者養成課程における教育のあり方を、開講科目の構成と教育内容、教育方法の視点から具体的に提案した。

まず、3つの目標に対応した3科目を「総合演習」以外の科目として開講することが望ましい。しかし、各養成機関の事情にあわせて、<1>と<2>に対応する科目を同一科目としたり、「総合演習」で

対応することもやむをえない。<3>に対応する科目は保育内容の指導法に関する科目で行なうことが適切である。教育内容は、身近でわかりやすく、リアルタイムの話題を提供し環境問題や自然について理解を深めるとともに、幼児期の環境教育の重要性を認めさせ、自らの生活に密着した調査などから行動への変容をはかることが必要である。また、基礎的な保育技術を習得させた上で、学生自身が自然の中で楽しく遊んだり、遊びを創造する喜びを味わえるような体験の内容を数多く設定し、自然に対する感性を豊かにし、自然と触れ合う遊びの指導技術を習得することが重要である。教育方法は、知識の一方的伝授ではなく双方向型や参加型、体験型の学習を多く取り入れること、視聴覚教材やインターネットの活用、学外講師の起用などが有用である。

以上のような教育のあり方が考えられるが、時間的余裕はなく、各保育者養成機関において早急な検討が必要である。また、保育者養成機関は保育現場と協力して幼児期の環境教育の具体的保育実践の研究に努めるべきで、現場同士や養成機関とのネットワーク化をはかり、広く普及させるためのセンター的役割を担うことが今後の課題であろう。また、今後、保育者養成機関へ入学してくる学生は、新教育課程を経て環境教育をかなり受けてくるであろう。したがって、保育者養成においては、自然と触れ合う遊びを中心とした幼児期の環境教育の保育実践力を持つための教育へと重点を移し、環境教育の視点も取り入れた「自然との関わり」を援助するための教育内容の充実が求められるが、その具体的内容については今後の課題として検討したい。

#### 引用文献

井頭均, 1993, 幼児に対する環境教育, 聖和大学

論集, 21, p. 163~166.

井上美智子, 1992, 幼児期における環境教育の必要性について, 姫路学院女子短期大学紀要, 19, p. 173~181.

井上美智子, 1993, 保育における環境教育について—養成校としての対応—, 姫路学院レビュー, 16, p. 125~138.

井上美智子, 1995, 保育者志望学生の動物飼育経験について, 姫路学院女子短期大学紀要, 22, P. 127~138.

岩崎婉子・藤樫道也・関口準, 1995, 幼稚園における環境教育(4) 保育への位置づけ, 日本保育学会第48回大会研究論文集, P. 430~431.

呉宣児・無藤隆, 1998, 自然観と自然体験が環境価値観に及ぼす影響, 環境教育, 7-2, P. 2~13.

田尻由美子, 1985, 短大生の自然認識について, 精華女子短期大学紀要, 13, P. 61~66.

田尻由美子・井上美智子, 1995, 保育者養成課程における環境教育について—教員の意識及び教育内容と方法に関する調査—, 精華女子短期大学紀要, 21, P. 149~156.

田尻由美子・峰松修・井村秀文, 1996, 幼児期環境教育の現状と課題—幼稚園及び保育所における環境教育実態調査—, 精華女子短期大学紀要, 22, P. 129~140.

田尻由美子, 1997, 保育者養成機関における環境教育プログラムの開発について, 精華女子短期大学紀要, 23, P. 153~165.

和田武, 1993, 大学での多人数環境教育と学生の環境意識, 行動変化, 日本環境教育学会第4回大会研究発表要旨集, P. 27~28.

付) 本研究は文部省科学研究費補助金(課題番号 08680212)により実施したものである。